

滿鐵總裁

## 大村卓一氏

最近各方面に於て土木技術人の躍進著しいものがあり、世人の注意も大に此方面に向けられてゐる、之は正しく我國力の發展を示す一證として我々の欣快にたへない處である。

その代表的な一人として滿鐵副總裁であつた大村卓一氏が三月二十四日に新總裁となつて松岡洋右氏の後を繼いだ事である。數ヶ月前に八田嘉明氏を國務大臣に迎へた喜の際であるから、爰に於て「西に大村あり、東に八田あり」と言ふ時代の力である。

兩氏とも純土木技術家であり、兩氏とも精勵格勤であり、兩氏とも先覺的人格者である點が相似てゐると思ふ。

大村氏は酒も煙草も好まない敬虔なクリスチャンである。之は札幌農學校の創立者たるクラーク先生の感化に依るものと思はれる。クラーク先生が五十年前に札幌を離れるとき「ボーイズ・ビー・アンビシャス」と叫んだ有名な言葉は今日も尙ほ若き開拓者の間に傳つてゐる。而して札幌農學校からは若き日本に幾多の先覺的指導者を送り出した。故人となられた廣井勇博士や、新渡戸稻造博士や、内村鑑三氏などは餘りにも有名である。大村氏の同窓としては今尙ほ活躍中の元海軍建築局長たりし眞島健三郎博士がある。大村氏が現職にある最後の一人として、而して今や最大の脚光を浴びて新東亞建設の大舞臺に立ち、滿鐵總裁としての重職に就いたわけである。クラーク先生なり、廣井先生なりの靈もさぞ御満足の事であらう。

滿鐵には以前は野村龍太郎博士や、國澤新兵衛博士や、仙石貢博士などの技術家が社長とか總裁になつたが、今度久しぶりに大村氏が技術家として總裁の倚子に就いたわけである。従つて大村氏には技術家の理解が多分にある筈だが、何分長い間、殖民地の鐵道管理をやつてゐたのであるから、東京に於ける技



大村卓一氏

術界との交渉は至つて少かつた。従つて中年の技術家には土木家としての大村氏を認識しない人が多かつた事と思ふ。

大村氏を最も良く認識してゐるものは軍部である。それは大村氏が大正七年のシベリヤ出兵當時から常に大陸の鐵道管理に當つてゐたので、大陸進出の最前線に活躍する軍部としては最も多く大村氏を知つてゐる筈である。大村氏が膠濟鐵路局顧問技師となり、又は朝鮮鐵道局長たりし時代は最もよき大陸研究の時期であつた様だ。昭和七年に關東軍の交通監督部長になつたのも、同十年九月滿鐵副總裁になつたのも當然の事である。

大村氏が今度總裁の職に就て、世間では政治的手腕が乏しくては滿鐵の大舞臺は廻し切れまいと言つてゐる向がある様だが、大村氏が技術家だから政治的手腕が乏しいと斷言は出来ないのである。況んや今日の政治的手腕と云ふのは、昔の待合政治や、親分兒分の辣

腕ぶりを言ふのではあるまい。先年大村氏同窓の某氏は廣井博士の墓前に於て「政治的趣味のあつた大村は今回滿鐵副總裁になりました」と報告した。それを見ても大村氏が學生時代から唯單なる技術家肌でなかつた事がわかる。それに軍部の信頼大なるものがあるから世人の心配無用である。

大村氏が今年六十八歳の老齡で滿鐵總裁の激務にたへ得らるゝだらうかと云ふ人もある。激務にたへぬ様な人を總裁に据へる筈もないが、實際大村氏の精神力は大村氏の健康と若さを十分に保持してゐるらしい。大村氏は今日でも零下何度かの滿州の屋外で、毎日裸體の體操をやつてゐるのである。それはあの瘦身の老軀にたへられぬ事と思はれるが、大村氏の信念はそれを當然の運動として實行してゐるのである。爰に大村氏の健康法を紹介する必要がある。

私は自分で考へて見ると非常に體が弱かつた。如何せん北海道に居つて寒い所で働くべき身體ではないと醫者に言はれた。それで之ではどうもならんと云ふので色々薬を飲んだり醫者に掛つたりしたが、そんな消極的な事をやつて居つては何時迄も身體を立て直すことは出来なかつた。何よりも大事な事は精神力の原動力たる自分の健康であります。如何に氣はあせつても身體が之を許さんければ仕方がない之は一つ自力更正と云ふか、今の言葉で「長期建設」と云ふか、さう云ふ決心でかからねばいかんと云ふ事を考へました。其處で藥の様な消極的なものでは駄目だ、詰り身體に對して外部から刺戟して來る其の力に對する抵抗力を増せば良いのだ。抵抗力を増すと云ふ事が身體の一つの大きな健康法であると云ふ風な事を段々考へ出して三十七、八から四十、五十、六十になつても尙續けてゐるのであります。

此丈の體操を二十年以上も繼續實行するには餘程の精神力を要すのである。信念の人たる大村氏の健康法は次の様な氏の哲學から出發してゐるのである。

世の中には絶えず凡て生き物の間には動物界は勿論植物界でさへさうであるが、整然として進ま

んとするところのものがあると思へば之を引き下して絶滅せむとして居る力が始終交つて働いて居るのであります。人間許りでなく國家もさうです。人類の生活が始り、歴史が始つて以來世の中の凡ての國の間凡ての民族の間に所謂戦ひのない時などばありはしない。所謂森羅萬象の現象は實に戦ひの生活である。私は之を觀て悲觀して居るが神は此の世界をして生物を此處に育成して居る、愛の手の下に皆を哺育して居るにも拘らず其の實際を見ると、凡ての動物凡ての植物をして戦はしめんとして居ると云ふ事だ。一滴の水にもその中に生死の激しき戦が演ぜられて居る、即ちこれを一萬倍に擴大して見るならば澤山の菌が水の中で戦をして居る。數多の異つた微粒子所謂マイクロアニマルが旺な葛藤をやつて互に一つは一つを呑む、呑んだ奴は又他のものに呑まれる、夫れが又外のものに呑まれる。生死の上の戦に渦巻きつゝあります。一滴の水の中ですらさう云ふ微粒子が戦をやつて居る。恰度私共が庭に出て見ると生々として草が生えて居る。木の葉が茂つて居るが、何處かに蟲が喰着いて之を絶滅せむとして居る。うつかりして居ると松毛蟲が松に喰着いて枯れて了ふ。斯う云ふ様に絶えず進撃力がありません。諸君の身體の中に數十萬、數百萬、數千萬と云ふ微菌が、邪魔者が、諸君を殺さんとして始終やつて居る。殊に八割位の人ば結核菌を持つて居るのであります。故に我々は如何にして斯う云ふ様な動物界の已むを得ない様な立場に立つて抵抗力を養ひ夫れを克服して行くかと云ふ問題に直面して居るのであります。無論之は肉體的問題許りでなくて精神的にもさうだと思ふ、絶えず諸君を誘惑せむとする悪魔がある。都會には殊に都會病と云ふ様なものがある。都會病は肉體的に於て最も多いのみならず、凡ゆる方面から精神的にも襲つて居る。

諸君を引下げやう、諸君の健康を害しやう、諸君を墮落させやう、身を持ち崩させやうと考へて居るところの悪魔が絶えず居る。之に對して如何にスタンドし得るかスタンドし得ないかが、諸君の將來の分れ路を決する問題であります。斯う云ふ所に立つて我々は生活して居る。之をこの社會から排除しようとしても不可能である。自然の原則としてさうなつて居るからである。故に我々は  
(以下 203 頁へつゞく)